

魂との邂逅

2025. 12. 2

ある人が、自伝的工作論を書いた。今まで出版した著書は、すぐに増刷がかかるほどだった。ところが、この著書は、なぜか、全く増刷の声がかからなかった。内心、こうした自伝的工作論など、あまり求められていないのか・・・と、少し落胆していた。

ある夜、一通のメールが届いた。それは、会社で働いている若い女性のようなこと書かれてあった。

家に帰る終電の中で、この本を読みました。涙が止まりませんでした。この本を有り難うございます。

ある人は、このメッセージを読んで、こう思った。ああ、このたった一人の読者でもよい。こんな思いで読んでくれる読者がただけで、もう十分だ・・・。不思議なことに、この著書は、その後、ある人にとって最初のロングセラーとなった。

かつて、文芸評論家の亀井勝一郎が、その『読書論』の中で、「読書とは、著者の魂との邂逅である」と述べていた。ある人は、言っている。私は、著者としての歩みの中で、「執筆とは、読者の魂との邂逅である」と考えている。

私の場合は、魂などというレベルではない。だが、それでも、いつも読者のことを考えながら書いている。たった一人のことを意識して書くこともある。そのほうがいい文章になる。たった一人に向けて話したり、たった一人に向けて書いたりしたほうがよい。かえって、聞き手にも、読み手にも伝わりやすくなる。

残念ながら、著者の魂と言えるほどのものは持ち合わせてはいない。そもそも、そのレベルにチャレンジしたこともない。最初から諦めている自分がいる。どうせ無理だ。たぶん無理だろう。自分に勝手に制限をかけてしまっている。こういったことは多い。自分の可能性を自分でつぶしている。そのほうが楽なのかもしれない。

高校生の頃に、よく亀井勝一郎の本を読んだ。おもしろかった。ためになった。今は、毎日のようにエッセイを書いている。だが、自分の中には、評論に対する憧れのようなものがある。書いてみたいという思いをずっと抱いている。書くためには、それなりの知識や専門性が必要となる。このハードルは、決して低くはない。今更ではあるが、そろそろチャレンジしてみようか。